研究調査報告

# 栗原信が描いた中国風景
# —近代日本美術の図版発掘（2）—

彭　国躍
（非文字資料研究センター　研究員）

## 1. はじめに

栗原信（1894～1966年）は、20世紀前中期頃に活躍した異色な風景画家である。茨城県東茨城郡に生まれ、1912（明治45）年に茨城師範学校を卒業し、22歳の1916（大正5）年に作品「木」で第3回二科展に初入選を果たし、以後1927（昭和2）年まで繰り返し同展に入選していた。34歳の1928（昭和3）年にフランスのパリに留学し、29年、30年に連続してサロン・ドートンヌに入選し、その後ヨーロッパの13カ国を美術巡礼で訪れ数多くの風景画を制作した。37歳の1931（昭和6）年に帰国し、その後33年に台湾、34年に満州に取材旅行に出かけた。第二次世界大戦中44歳の1938（昭和13）年から50歳の1944（昭和19）年までの間に、従軍画家として中国大陸、東南アジアに繰り返し赴き、戦争記録画の制作のほかに多くの風景画を描いていた。戦後56歳の1950（昭和25）年に新潟大学芸能学科洋画科教授となった後にもメキシコ、ブラジル、チリやインドなどへと写生旅行に出かけ風景画の制作に勤しんだ。彼は1957（昭和32）年頃に随筆「私の旅と作品」の中で、自分の作品について「風景画と言うよりも、ある意味では旅人の旅情をこめた記録である」[1]と称している。

1960（昭和35）年6月号の『アトリエ（400）』に寄せた随筆「風景画について」の中で、彼は中国南北朝・南斉（479～502年）の画家謝赫（生没年不詳）の絵画理論に触れ、次のように述べている。「中国の画論に“謝赫の六法”と言う、作品に必要な六つの条件が上げてある。その中の最も重要な“気韻生動”は“教えて伝うべからず、学んで得べからず、千里の道を往き、万巻の書を読め”と説いている。“千里の道を行く”のは経験を積むことであり、“万巻の書を読め”は、教養を身につけよ、と言うことであろう」（p. 5）。東西の芸術論に通じる栗原は、生涯をかけて旅情をこめた旅の記録を描きつづけ、彼自身の理想的な風景美を追い求めていた。

栗原の友人宮本三郎（1905～1974年）は、彼が南米に旅立つ目前に書いた随筆「栗原と僕」[2]の中で、栗原の従軍画家時代の創作活動について、彼は中国大陸に魅せられ、「そこに画材を求めることと、生活を便ずることと、その双方を解決してゆくことに或る英雄的な喜びを人知れず味わっていたようである」と述べ、そして、旅立つ前の栗原に向かって「……多分、風景画家としての君が、平野よりも険峻を好むところから押して、自然と自身との間にもっとけわしい無慈悲な対立を希望するのかと考えられる。くみしやすい自然や、馴れあいの自然では、君の心はもう歌わなくなったのであろう」と述べ、栗原の異郷風景への憧憬と飽くなき探究心を讃えていた。

栗原が戦前描いた風景画作品は戦災などで多く散逸した[3]。彼が描いた中国大陸の風景画作品のカラー図版の発掘は、一人の画家としての彼の創作活動の足跡を知る手がかりとなるだけでなく、近代日本の画家たちがどんな時期に中国大陸のどこに行き、どんな風景を描いていたのかという、歴史の闇に消え去ろうとする史実のビジュアル情報を記録にとどめることになる。

表　栗原信の中国風景作品の画展出品一覧

| 出品年 | 出品画展 | 出品作品画題（22点） |
|---|---|---|
| 1934（昭和9） | 第21回二科会美術展 | 「スンガリー（松花江）の夏」「砂漠の午（外蒙）」「ハルピン中央寺院」 |
| 1935（昭和10） | 第22回二科会美術展 | 「夏の喇嘛塔」「夏の満州」 |
| 1936（昭和11） | 第11回春台美術展 | 「ラマ塔」 |
| 1936（昭和11） | 第8回新美術家協会展 | 「冬のハルピン寺院」「熱河の山」「熱河承徳」 |
| 1936（昭和11） | 第23回二科会美術展 | 「秋の熱河承徳」「居庸関（北支）」 |
| 1937（昭和12） | 第24回二科会美術展 | 「北平」 |
| 1939（昭和14） | 第26回二科会美術展 | 「大陸（黄色い瓦）」「大陸（城外）」 |
| 1940（昭和15） | 第27回二科会美術展 | 「蒙古の旅」「秋（ハルピン）」「朝（ハルピン）」 |
| 1940（昭和15） | 第5回京都市美術展 | 「水辺新緑（北京）」 |
| 1940（昭和15） | 第3回朱玄会美術展 | 「秋のハルピン」 |
| 1941（昭和16） | 第28回二科会美術展 | 「酪農部落（北満）」 |
| 1943（昭和18） | 第30回二科会美術展 | 「永豊鎮（北満第一回集団移民地）」 |
| 1943（昭和18） | 第2回大東亜戦争美術展 | 「北京」 |

## 2. 栗原信と中国大陸

栗原信は、終戦までの十数年間に 20 回ほど中国大陸に赴き、創作取材を行っていた。彼は 1934（昭和 9）年頃から中国大陸関連の作品を二科会などの各種美術展に次々と出品していた。1936（昭和 11）年までは写生旅行で中国の東北地域（「満州」）に渡っていたが、日中戦争が始まった 1937（昭和 12）年後には絵の具の配給や旅費の提供が受けられる従軍画家の機を利用し戦争画制作の責を負いながら大陸風景を描きつづけていた。記録に残った彼の中国風景作品の画展への出品状況は前頁の表で示す通りである。

栗原は、いつ、どの地域に渡り、何を描いたかについて詳細な記録は見つかっていないが、上記の作品リストと筆者所収の（水彩スケッチを含む）作品図版の画題に基づき、彼が訪れた地域をある程度推定することができる。彼の足跡は、地域名で辿れば黒龍江省の哈爾浜（ハルビン）市、佳木斯（ジャムス）市、牡丹江市の横道河子、内蒙古の呼倫貝爾（フルンボイル）市の海拉爾（ハイラル）、遼寧省の瀋陽（奉天）市、北京市、河北省の熱河市、山西省の大同市、江蘇省の徐州市などとなり、河川名で辿れば東北地域の松花江、華北地域の黄河、華中地域の湘江、西南地域の怒江となる。彼の足跡は中国の北方地域を中心としながらも大陸の広範な地域に広がっていたことが分かる。

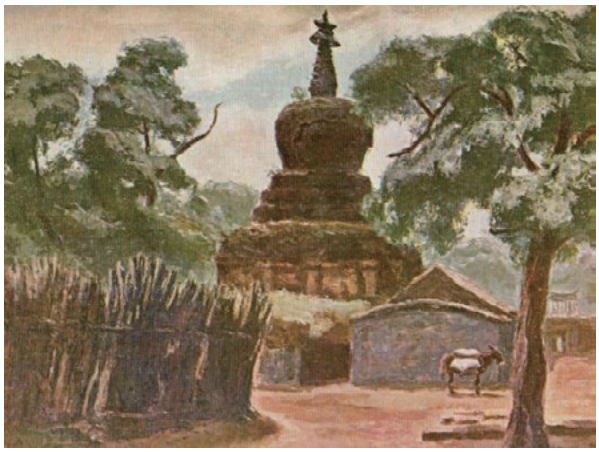
## 3. 中国風景の図版発掘

筆者が把握している栗原信の中国関連作品の図版は全部で 25 点であるが、ここではそのうち美術展の出品情報が分かる 11 点の作品のカラー図版を開示する。「画題」では絵はがきの画像面に記載された文字情報を、「図版出典」では絵はがきの裏面に記載された文字情報をそれぞれ記し、「図版サイズ」では絵はがきの図像部分の寸法を示し、「解説」では絵画の内容、背景や関連情報について説明する。

**①画題：「スンガリー（松花江）の夏」（第廿一回二科美術展覧会出品）**

図版出典：CARTE POSTALE・Union Postale Universelle・郵便はがき・神田美土代町萱ノ四美術工芸会発行
図版サイズ：12×8.8 cm
解説：中国東北の黒龍江省を流れる松花江のほとりで、白人女性と見られる 2 人が木陰のベンチで憩う光景が描かれる。背景には洋馬車が川沿いの道路を走り、馬車の客席には日傘をさした白いドレスの女性の姿が見える。画面を拡大して見ると、遠景の川には、数カ所ヨットの帆が水面に浮かび、対岸の緑の山々がかすかに地平線に映る。栗原は雑誌『美術（10）』（1934 pp. 51-52）掲載の作者コメント欄に「『スンガリの夏』は風景の画家の自分にとって試作である」と記しているが、当時 40 歳の彼が「試作」と言ったのは、スケッチに基づくアトリエでの油絵制作ではなく、実景を見ながら作品を仕上げるという意味だったろうが、（はがきの図版では多くは語れないが、）画像を眺めていると、従来印象派の画風と距離をおいてきた彼は、光や空気感を意識して制作した試作という意味にもとれそうである。この作品は 1934（昭和 9）年開催の第 21 回二科展に出品されたものである。同展には栗原の「ハルピン中央寺院」と「砂漠の午（外蒙）」も出品されている（前者の図版は未発見、後者のモノクロ図版は『美術 9（10）』1934 に掲載）。

**②画題：「喇嘛塔」**



図版出典：POST CARD・郵便はがき・満州観光連盟発行
図版サイズ：12×9 cm
解説：遼寧省の瀋陽（「奉天」）にあるチベット仏教寺院の喇嘛塔（1645 年建立）が描かれている。本図版は、1935（昭和 10）年の第 22 回二科展の出品作「夏の喇嘛塔」とは同一の作品である。同展には栗原の「夏の満州」も出品されているが、カラーの図版は未確認である（モノクロ図版は飯野 2013 p. 47 に掲載）[4]。洋画

家片岡銀蔵（1896～1964 年）も同じ塔をモチーフにした作品「ラマ塔」を 1936（昭和 11）年の第 11 回春台美術展に出品している。中国を訪れた日本人画家の多くは寺院、仏塔や教会堂など中国の宗教施設を好んで描いていたようである。

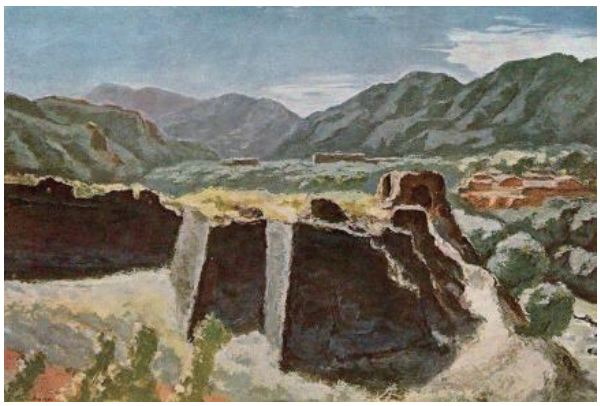
**③画題：「冬のハルピン寺院」（第八回新美術家協会展出品）**

図版出典：POST CARD・郵便はがき・東京久保田製版所印行
図版サイズ：11.6×9 cm
解説：画面の中央にはロシア正教のイベルスコイ教会の入り口が描かれている。地面には雪が積もり、教会境内の樹々にも積雪が見え、垣根には、（内容は読み取れないが、）横文字の看板が立っている。この作品は 1936（昭和 11）年開催の第 8 回新美術家協会展の出品作である。洋画家鶴田吾郎（1890～1969 年）も同じ時期に同じ教会を描いた作品図版を残している[5)]。栗原は 1940（昭和 15）年の第 3 回朱玄会美術展にハルビンの中央寺院（聖ニコライ会堂）を描いた「秋のハルピン」を出品しているが、カラーの図版は未発見である（モノクロ図版は飯野 2013 p. 376 に掲載）。

**④画題：「承徳の秋」**

図版出典：POST CARD・郵便はがき・満州観光連盟発行
図版サイズ：11.3×9 cm
解説：画面の中央には承徳の街中をせんせんと流れる武烈河と装飾性のある石橋が描かれている。画面の右端には寺院の外壁の一角しか描かれていないが、石橋はその仏教寺院須弥福寿廟の入り口へとつながる。画面右上の遠景には清朝離宮の一部であるチベット式建築の普陀宗乗廟が見える。この作品は 1936（昭和 11）年開催の第 23 回二科展に出品された「秋の熱河承徳」とは同一の作品である。「秋の熱河承徳」という画題で発行された絵はがきも残されている。

**⑤画題：「居庸関」**



図版出典：POST CARD・郵便はがき・満州観光連盟発行
図版サイズ：13.3×8.8 cm
解説：居庸関は万里の長城の関所で、北京を守る要塞の一つである。画面中央には風化した長城の一部が、遠景

にはつらなる群山が描かれている。（絵はがきには出品情報は表示されていないが、）この作品は 1936（昭和 11）年の第 23 回二科展に出品された作品「居庸関（北支）」とは同一の作品である。栗原は 1941（昭和 16）年の第 2 回聖戦美術展に戦闘画「居庸関戦闘図」を出品したが、彼は戦闘画制作のために再度居庸関を訪れたのか、それとも従軍画家になる前に描いた風景画の取材経験を生かして描いたのかは定かではない。

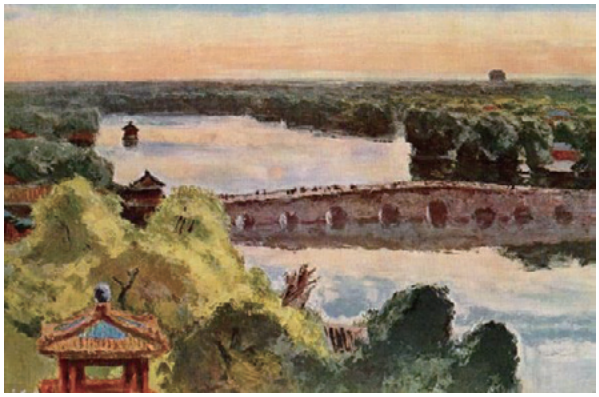
**⑥画題：「熱河の山」（第八回新美術家協会展出品）**

図版出典：POST CARD・郵便はがき・東京久保田製版所印行
図版サイズ：11.6×10 cm
解説：「熱河」は現在の河北省、遼寧省、内蒙古自治区が交わる地域の都市名であるが、1928～48 年の一時期にはその地域の省名となっていた。熱河の山々は北方の黄土高原特有の地肌をむき出しにしたはげ山が多かったようだが、この絵は 1936 年初春頃までにその地域の山々と麓の村落を描いたものである。画像を拡大して見ると、画面中央右の土塀のわきには馬車と人影が点景として描かれ、村人の生活をのぞかせている。この作品は 1936（昭和 11）年 4 月開催の第 8 回新美術家協会展に出品されたものである。

**⑦画題：「熱河承徳（水彩）」（第八回新美術家協会展出品）**

図版出典：POST CARD・郵便はがき・東京久保田製版所印行
図版サイズ：12×9 cm
解説：この水彩画作品は、熱河の承徳にあるチベット仏教寺院普陀宗乗廟の側面風景であり、栗原が 1936 年初春頃までに現地で描いたものと推定される。この作品は 1936（昭和 11）年の第 8 回新美術家協会展に出品されている。その前後頃に、矢崎千代二（1872～1947 年）、藤田嗣治（1886～1968 年）、川島理一郎（1886～1971 年）、和田香苗（1897～1977 年）、横堀角次郎（1897～1978 年）や大山英夫（1911～2006 年）など多くの洋画家が熱河承徳を訪れ、離宮の遺跡風景を描いていた。

**⑧画題：「北京」**



図版出典：POST CARD・郵便はがき・満州観光連盟発行
図版サイズ：13.6×9 cm
解説：この作品は北京の清王朝の離宮頤和園を丘の上からながめる眺望風景である。画面の右中央には十七孔橋

が描かれている。この作品は「北平」（120 号）という名で 1937（昭和 12）年の第 24 回二科展に出品されたものである（『現代洋画コレクション 13』〔アトリエ社 1938〕にカラー図版掲載）。1943（昭和 18）年の第 2 回大東亜戦争美術展には、栗原の同名作品「北京」が出品されたが、絵画の内容は本作品とは異なるものである（カラー図版は未発見、モノクロ図版は『大東亜戦美術（第二輯）』朝日新聞社 1945 に掲載）。

**⑨画題：「大陸（黄色い瓦）」（第二十六回二科美術展覧会出品）**

図版出典：POST CARD・郵便はがき・東京牛込西五軒町・日能製版印刷所印行
図版サイズ：12.3×8.7 cm
解説：この作品の題名には特定の地名が記されていないが、その黄色い瓦の建築群の規模から考えると、皇城の北京を描いたものと推定される。紫禁城とその連綿と続く黄色い屋根の建物群を城外の丘の上からながめた風景である。この作品は 1939（昭和 14）年に開催された第 26 回二科展に出品されている。同じ時期に梅原龍三郎（1888～1986 年）や安井曾太郎（1888～1955 年）が描いた北京建築風景はよく知られるが、筆者所収のカラー図版だけでもそれらのほかに中沢弘光（1874～1964 年）の「景山より紫禁城を瞰る」、伊谷賢蔵（1902～1970 年）の「北京中海公園より白塔を望む」や長谷川一陽（生没年不詳）の「紫禁城」などがある。

**⑩画題：「蒙古の旅」**

図版出典：軍事郵便・郵便はがき・陸軍恤兵部発行・東京市瀬印行
図版サイズ：11×8.5 cm
解説：栗原の随筆「私の旅と作品」の中でモンゴルを訪れた時の思い出として次のように語っている。

「あこがれの蒙古草原に立った時のことです。

初夏の草原には色とりどりの花が咲き、五月の風に吹かれているのでした。リスは穴から出て背伸びをしながら草の上を駆け回っていました。

舟底のような流れる雲と地平線の融け合うあたり、ところどころ夕立の影と、シミのような羊群が眼に入るばかりで、全く広袤万里という通りでした。

“もしもし”と汚い男が私のそばに寄って来ました。私の周囲は羊の群れにとり囲まれていました。

“一匹買わないかね”とその男は羊を指さしました。

“いくらなのかね”と私は気のない返事をしました。

“一匹七円だ”と男は指で数を示しました。

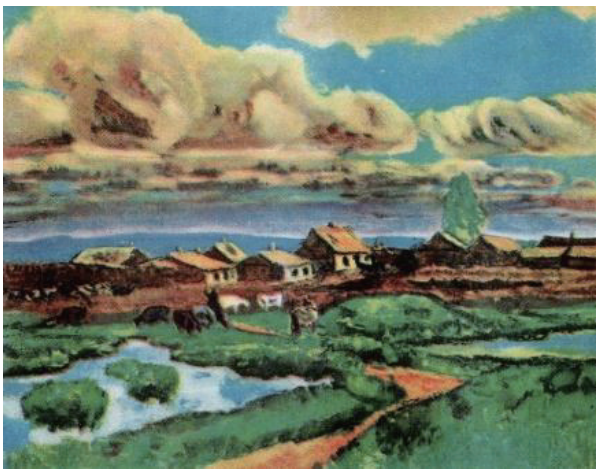
“私は要らない”と手を振ってこたえました。

その羊番は、私の答に失望して首を振りました。

私との原始的商取引のチャンスを失った彼は、また羊群を追って地平線の彼方に、彼等の生活の場に帰るべく消え去ったのです。」[6]

この「蒙古の旅」の絵の内容はまさにその時に出会った羊番と羊群を描いたものであろう。この作品は 1940（昭和 15）年の第 27 回二科展に出品されている。同展には栗原の「秋（ハルピン）」（図版不詳）、「朝（ハルピン）」（モノクロ図版は飯野 2013 p. 449 に掲載）も出品されている。

⑪画題：「北満の酪農部隊」



図版出典：軍事郵便・郵便はがき・陸軍恤兵部発行・東京市瀬印行
図版サイズ：10.8×8.5 cm
解説：この作品には青空に浮かぶ雲と緑豊かな牧場の風景が描かれている。栗原の風景画は若い時に描いたスペインの乾燥した岩山を彷彿させる重厚感を与えるものが多いが、この作品は少し趣の異なるみずみずしい草原風景である。作品は 1941（昭和 16）年の第 28 回二科展に出品されている。『昭和期美術展覧会出品目録（戦前篇）』（東京文化財研究所美術部編 2006）では第 28 回二科展の出品作として「酪農部落（北満）」と表記されているが、「郵便絵はがき」では「北満の酪農部隊」となっている。画題変化の経緯は不明だが、軍事郵便の印刷に提供した際に何からの理由で変更された可能性がある。この作品の原画は栗原信の出身地茨城県（個人蔵）に残っている。

## 4. おわりに

栗原のフランス留学時代からの友人柳亮（1903～1978 年）は随筆「栗原信の人と芸術」の中で栗原の画風、気質について次のように語っている。

「栗原信と私が識ったのは、お互いの滞仏中、昭和三・四年ころだったろう。パレットナイフでねっとりと分厚く塗りこんでいく腰の強い重厚な描法も、一抹の哀愁をふくんだ地味な色調も、終始一貫、風景画に専念して、わき目をふらぬひたむきな態度も、そのころからのものであった。当時彼は印象派系の、色彩的で軽快ではあるが、どこか浮薄なその画風には懐疑的で、あかぬけはしないが英国の自然主義の質実な技術にむしろ共鳴していたと記憶する。」[7]

宮本三郎は栗原が亡くなった後に故人を悼む「栗原信君懐古」（『三彩』〔205〕1966 p. 44）の中で次のように述べている。

「君の画風はフランスで習得したナイフ描きの堅実なものであり、当初、或る程度の新味を見せはしたが、つねにその温健な写実風を守って生涯を通したと云うべきであろう。最初の頃は、カンヴスで現場制作も試みたようだが、多くは現場はペンと水彩で写し、これをアトリエで油絵制作に移すという風だった。このナイフ描きは厚盛りで、その効果を収めるにはかなり長い日数を要したようだ。世界各地で成されたこの準備的な水彩画を得ることが画家としての君の最上の楽しみであったろう。」

本調査報告で取り上げた中国風景の作品にも、（80 年以上も前の絵はがきの図版とは言え）柳と宮本両氏が述べたような栗原の画風がにじみ出ているのではないかと思う。そして、戦時中の従軍画家たちが描いた中国風景には日本兵の姿や日章旗が点景として加えられるものが少なくなかったが、栗原の風景作品にはそのような点景は見当たらない。風景画は、栗原信にとって妥協の許されない美の「聖域」だったのかもしれない。

【注】
注 1：栗原信　1957「私の旅と作品」『栗原信近作画集』二紀会（画集には頁数が付いていない）。
注 2：宮本三郎　1957「栗原と僕」『栗原信近作画集』二紀会。
注 3：栗原信の中国関連の戦争記録画「怒江作戦」（1944 年制作）と「湘江補給戦に於ける青紅幇の協力」（1945 年制作）は現在東京国立近代美術館に所蔵されている。
注 4：飯野正仁　2013『戦時下日本美術年表 1930-1945』藝華書院。
注 5：彭国躍　2023「鶴田吾郎が描いた中国風景−近代日本美術の図版発掘（1）」『非文字資料研究センター News Letter』（50）神奈川大学非文字資料研究センター。
注 6：柳亮　1957「栗原信の人と芸術」『栗原信近作画集』二紀会。
注 7：栗原信　1957「私の旅と作品」『栗原信近作画集』二紀会。